

# 相互行為を通して達成されるポライトネス

## —話者間の意図が対立する際のスタンス調整によるポライトネス達成—

木村恭大（明治学院大学大学院生）

### 1. はじめに

本研究は、職場で指示型の発話がなされる場面において、発話者と聞き手双方の指示への意図が対立する場合、人々はどのようにポライトネスを達成していくかを明らかにすることを目的とする。職場では様々な指示がなされる。それらは指示型発話といい、Searle(1979)にならい、聞き手に何かをさせようとする話者の試み、と定義する。指示型発話は、フェイス侵害の度合いが高く、ポライトネスに関連が深い発話行為であると考えられる。本研究では、指示型の談話を分析対象とし、その際のポライトネスを、近年注目を集めるスタンステイキングの観点から観察する。このように双方の意図が対立する際の指示型談話を観察すると、たとえ意図が対立していても、双方が自身のスタンス、特に認識的スタンスを調整し、双方が納得する形に収まると、ポライトネスも達成されることが考えられる。

### 2. 研究背景・研究課題

Brown & Levinson(1987)は、フェイスの概念(Goffman, 1967)をもとにポライトネスを捉えた。人は自分のイメージ、フェイスを常に保っていたいという基本的な欲求があるが、発話はそれを脅かす可能性を持つ行為(FTA)であるとした。その上で、ポライトネスを、話し手が様々な言語的方策を用いてフェイスに配慮することであるとした。それに対して、Watts(2003)などでは、話し手の発話やそのポライトネスの意図だけでなく、聞き手のポライトネス解釈も考慮すべきとされた。その中でGrainger(2011)は、ポライトネスは相互行為の中で達成されるものであるとした。またその上で、相互行為の担い手双方のコミュニケーションの目的が円滑に達成されるかがポライトネス理解の一つの尺度となるとした。

以上の先行文献から、ポライトネス達成は、コミュニケーションの目的や意図が円滑に達成されるかを基準とする場合、相互行為を行う段階で目的や意図が対立する際は、談話全体でのポライトネス達成が可能なのか、という疑問が生じる。そこで本研究は双方の目的達成という点に着目して、指示型発話遂行時の話者間の意図が対立する際に、Grainger(2011)のいうポライトネスが達成されるのかを探る。また、達成される場合、どのような過程を経るのかを観察する。

### 3. 方法論

今回は、ある学習塾で行われる職員(先生)間の会議を録音、書き起こしたものをデータとして使用する。会議の参加者は、室長、男1、女1、男2の4名である。室長はこの塾の責任者で、授業を受け持つ講師でもある。4名の中で最もパワーのある人物である。次に男1はこの塾で3年ほど勤めるアルバイト講師。女1は、専任職員であり、勤続3年ほどであるが、他の分校から異動してきたため、室長とは1年ほどの付き合いである。最後の男2は専任の新入職員である。

以上4名の間で行われる会議の際の指示型談話を分析対象とする。コミュニケーションの目的・意図という点に着目すると、指示を出す側は、指示の受け手にその指示を理解させ、受諾させる意図があると考えられる。しかし一方、受け手がその指示の承諾を望まない場合、双方の意図に対立が生じる。このような場合の相互行為を、スタンステイキングの観点から分析する。

Du Bois(2007)は、スタンステイキングを対話的で間主観的な社会的行為であるとし、評価、位置づけ、相手との位置づけの調整、の三行為によって構成されているとした。また、スタンスには大きく、認識や知識に関するものと感情に関わるものの二種類あるとされる(Du Bois, 2007; Jaffe, 2009)。さらに、Du Bois(2007)は、スタンスの理論は意味のあるコミュニケーションであればどのようなものでも分析可能な理論であるとした。彼の理論に沿うと、指示型の談話もスタンスの観点から捉えていくことが可能であるといえ、本研究ではDu Bois(2007)のスタンス理論を採用し、指示型談話に現れるポライトネスを観察する。

#### 4. データ分析・考察

以下の抜粋は、指示に対する出し手・受け手の意図が異なる際の一場面であり、両話者がスタンスを調整することでポライトネスを達成する過程が観察できるデータである。抜粋1では、室長からアルバイト講師の男1に対して、週末の土曜日、模試監督業務のために普段より早めに出勤してほしいと指示する場面である。前提として、アルバイト講師は普段午後6時半までに出勤する必要があるが、模試の運営がある際は午後4時に出勤する必要がある。<sup>1</sup>

##### 抜粋1

- 1 室長：よしじゃあ(5.0)そんな形で(4.0)じゃあむねさん((男1))土曜日ー(0.5)模試があるんだけどー
- 2 男1：はい。まあ可能な限り(0.5)早く来ますけど。
- 3 室長：5時とかってこれるかなー？
- 4 男1：5時には来れると思います。ちょっと4時はきついです。5時ですね。
- 5 室長：じゃあ5時でいいっすか？
- 6 男1：はい。

1行目で、室長は男1に対して指示を出す。その際、約4秒の間があり、指示を躊躇していること、さらには模試があると言うだけで直接的な指示を避けていることから、模試の運営のために男1を早く出勤させることにマイナスの評価をし、それに基づき、自身を、FTAを避けるべき者であると位置づけている。それに対し男1は、模試があるという情報を聞くことで早く来いという指示であると認識するが、その指示内容、4時に来ること、は大きな負担になると評価し、完全には承諾しないという位置づけをし、室長のスタンスには同調しないというスタンスをとる。これは4行目の発話からも観察できるが、ここで双方の指示に対する意図が対立していることがわかる。

男1は、可能な限り早くは来る、と直接的なFTA、つまり、直接的に断るという行為を避け、間接的に指示を断ることで、ネゴシエーションを持ち掛けている。それを受けて、室長は、アルバイト講師を普段より二時間以上も早く来させることは、元の自身の認識よりも負担が大きいものであると認識的スタンスを改め、午後5時にくるようにと妥協点を提示する形で指示を出しなおす。これを受け、男1は、5時という時間に対し、妥当であると評価し、5時に来ると自身を位置づける。その位置づけは、3行目の室長の認識的スタンスと

<sup>1</sup> 文字化の際、個人の名前に関する箇所は同一モーラ数の仮名に変更している。

同様なことから、男1が、室長のスタンスに同調していることがうかがえる。

そして5行目で室長は、再度出勤時間を確認し、男1もそれを了承して、双方のスタンスが、午後5時に出勤するという妥協点に一致する。またその際、双方の目的が、一部ではあるが大きな衝突なく達成されることから、談話全体でポライトネスも達成されていると考えられる。

そこには指示に対する意図のみではなく、双方が会話をポライトに進めていこうという意図が働いていると考えられる。これは室長の間接的な指示、および妥協案の提示の際も、5時には来られるか、と形式的には相手に選択肢を与えるような方策を用いている点からもわかる。受け手である男1も、直接的に断るのではなく、ネゴシエーションを持ち掛けている点、さらに、4行目で4時には来られないと言う際も、ちょっと、とヘッジを使用してFTAの度合いを下げようと試みていることからわかる。以上のように、指示に対する双方の意図が対立する場合でも、双方にポライトネスへの意図があり、そこでスタンスの調整が行われることで、談話全体のポライトネスも達成できると考えられる。

抜粋2は、室長から男2と女2に、生徒に関する情報データの更新作業を指示する場面である。生徒の情報は塾の運営に必要な情報であり、可能な限り早く更新することが求められる。しかし、このデータ更新作業は専任職員しかできないため、アルバイトが集めた情報は専任職員が更新する。1行目に室長が「その内容」と言っているのは、アルバイト講師が集めた情報のことを指す。

#### 抜粋 2

1 室長：じゃーその内容を(0.5)紙に書いて・さかきばらさん((女1))更新できるか?

2 女1：今日はちょっと無理ですね。

((中略：室長と男1の間で紙に書く内容をシェア))

3 室長：よし(0.5)じゃあきくち先生((男2))とさかきばら先生((女2))は自分のところを更新して。

4 男2：あはい。

((中略：室長が男1に後ほど紙を渡すよう指示))

5 女1：わたしも自分のはやります。

6 室長：おっけー

1行目で、室長は女1に指示を出す。そこから彼の認識的スタンスがうかがえる。この場面は会議の終盤で、これから自分が集めた情報に加え、アルバイトからの情報の更新作業をするのは、負担が大きいと評価し、間接的に指示を行うよう自身を位置づけている。ここには女1への配慮があり、先ほどの例と同様、選択肢を与えていることからポライトネスの意図も現れている。それに対し、女1は、その指示を断っているが、ここに指示に対する両者の対立がうかがえる。しかし、女1も、ちょっと、というヘッジを用い、直接的に断るというFTAを避けようという意図が表れている。

指示を断られたため、室長は、アルバイトからの情報の更新は求めず、自分のもののみ更新するよう自身の認識的スタンスを改める。これは、1行目で室長が示したスタンスの評価以上に、女1には両情報の更新は負担であると改めたと考えられるからである。しかし、負担であるとはいえ、その情報更新は急務であることに変わりはなく、少なくとも自分のものは今日中に更新するようにと妥協点を示している。それを理解し、女1も5行目で、少なくとも自分のものはやると自身のスタンスをはっきりと表明し、室長の示した妥協点に自身のスタンスを同調させている。これを受け、6行目で室長もそれを確認し、両者の意図が一部達成されている。また同時に、この談話全体でのポライトネスも達成されたと考えられる。

抜粋1と同様に、双方の指示に対する意図が対立する場合でも、双方のスタンスの認識に関わる部分を

調整することで、談話全体のポライトネスが達成可能であると考えられる。また、両抜粋の談話の進行とスタンスの取り方という点に着目すると、指示の出し手は、最初に出した指示が断られた後には自身の認識的スタンスを調整し、妥協点を示すという流れが見てとれる。また、指示の負担度も考慮し、ポライトネス方策もとることが観察された。指示の受け手が指示を断る際は、直接的に指示を断るというFTAを避けようとする意図が働き、間接的に断るスタンスを取るのに対し、示された妥協点には、自身のスタンスを明示的に同調させていきポライトネスを達成させようとするという一連の流れが観察された。そこには、双方が会話をポライトに進行しようとする意図もあることも、談話全体のポライトネス達成を可能にする要素であると考えられる。

## 5. まとめ

本研究は、指示型談話の際、指示の出し手・受け手双方の指示に対する意図に対立がある場合、談話全体のポライトネスが達成可能なのかという研究課題に沿ってデータの分析を行った。データでは、指示に対する意図が対立する場合でも、双方が自身のスタンス、特に認識的スタンスを調整しあうことで、一定の妥協点に双方のスタンスを同調させあうことが観察された。これにより、双方が一部ではあるが自身の意図を円滑に達成することで、Grainger(2011)のいう談話全体のポライトネスも達成可能であると考えられる。また、ポライトネス達成には、指示に対する意図が異なっても、双方が会話をポライトに進行しようとする意図が働いていると考えられ、スタンスの調整もこの意図により行われると考えられる。以上のように、話者のスタンスを観察することはポライトネス理解に有用である可能性が示された。

### 文字化の記号

(数字) : 間, 数字は秒数

. : イントネーションが落ちている

? : イントネーションが上がっている

(( )) : 補足情報

### 参考文献

- Brown, P., & Levinson, S. (1987). *Politeness: Some universals in language usage*. UK: Cambridge University Press.
- Du Bois, J. (2007). The stance triangle. In R. Englebretson (Ed.), *Stancetaking in discourse* (pp. 139-182). Amsterdam: John Benjamins Publishing Company.
- Goffman, E. (1967). *Interaction ritual: Essays on face-to-face behavior*. New York, USA: Pantheon Books.
- Grainger, K. (2011). 'First order' and 'second order' politeness: Institutional and intercultural contexts. In Linguistic Politeness Research Group (Ed.), *Discursive Approaches to Politeness* (pp. 167-188). Berlin, Germany: De Gruyter Mouton.
- Jaffe, A. (2009). Introduction: The sociolinguistics of stance. In A. Jaffe (Ed.), *Stance: Sociolinguistic perspectives* (pp. 3-28). New York, USA: Oxford University Press.
- Searle, J. R. (1979). *Expression and meaning: Studies in the theory of speech acts*. New York, USA: Cambridge University Press.
- Watts, R. J. (2003). *Politeness*. New York, USA: Cambridge University Press.